９月２８日（月）高校２年生医学コース
筑波大学附属病院見学

９月 28 日（月）、高校２年生医学コースの生徒が、筑波大学附属病院を訪問しました。今年度３回目となる今回が最後の病院見学となります。

大学病院に到着後、まず講堂にて、循環器内科の一戸医師から大学病院についての講話をいただきました。筑波大学が全国トップクラスの総合大学であることや、医師国家試験の高い合格率、豊富な診療科などについてご紹介いただきました。また、医師臨床研修制度の研修先としても人気が高いことに加え、女性医師や育児中の医師のキャリアを支援する制度が充実していることについてもお話しいただきました。

続いて、本校 OB でもある総合診療医の前島医師による模擬実習を行いました。生徒たちは二人一組になり、聴診器と血圧計を用いて血圧測定を体験しました。手動式の血圧計と聴診器を同時に使って血圧を測定することは、想像していた以上に難しく、医師の先生方のサポートを受けながら、互いに何度も挑戦しました。

その後、高血圧と低血圧の患者の症例を題材に、症例検討会を行いました。生徒たちは、提示された症例について、考えられる原因や次に必要な検査・対応について、思いつく限りの可能性を挙げながら活発に話し合いました。前島医師からは、低血圧の方が高血圧に比べて緊急性が高い場合があることや、総合診療医は症状だけを見るのではなく、その背景にある原因を探り、時には患者本人だけでなく家族にも目を向けながら診療することなどについてお話しいただきました。

昼食は大学の食堂で取り、午後からは院内見学に参加しました。

まず全員で高度救命救急センターを訪れました。センター長の井上医師からは、救急・集中治療科が担う役割は救命にとどまらず、災害時の医療や医療人の教育にまで及ぶことについて講義をいただきました。その後、生徒たちは事前に分かれていた３班に分かれ、ER、ICU・PICU、ヘリポートをそれぞれ見学しました。

ER では、一度に複数台の救急車を受け入れることができる設備を見学したほか、ドクターヘリに搭乗する際の実際の装備についても説明を受けました。普段は見ることのできない救急医療の現場に触れ、生徒たちは、その緊張感と高度救命救急センターが担う役割の大きさを実感していました。

当日はあいにくの天気でしたが、昼過ぎに雨は上がり、屋上へ行くことができました。ヘリポートは建物の 13 階部分にあたり、筑波の街を一望できました。想像していたより、シンプルな作りで、特に

周りに柵などもなかったので、その高さに若干の怖さも感じました。

次に手術部を訪れ、消化器外科の明石医師から、モニターに映し出された実際の手術の様子を見ながら、内視鏡手術やロボット手術について説明していただきました。特に、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いたロボット手術については、その手法や維持管理、今後の可能性について生徒からも質問が挙がり、関心の高さがうかがえました。

最後に、未来医工学総合研究センターを訪れ、装着型サイボーグ「HAL」を見学しました。人間の身体から発生する生体電位信号を利用し、本人の意思に沿った動きを可能にする実演を目の当たりにし、生徒たちは驚きの表情を見せていました。また、将来自分が医師になるという視点から、医療によって患者の自立をどのように支えていくことができるのかを考える貴重な機会となりました。

最先端の医療技術を目の当たりにした興奮冷めやらぬまま、生徒たちは帰路につきました。帰りのバスの中でも、見学した施設の感想や疑問、将来像、医学部進学への熱意についてなど、話が尽きない様子でした。今年度、医学コースの生徒たちは3回の病院見学を通して、地域医療の現場から高度先進医療まで、さまざまな角度から医療について学んできました。2年生も後期を迎え、いよいよ大学受験に向けた学習が本格化します。これまでの学びを通して描いた、それぞれの理想とする医師像・医療像を胸に、これからの学習にも邁進していきます。